

これからの学校教育における「ゆるさ」とジレンマ

上智大学教授 澤田 稔

個性化教育の延長線上で、私が最近考えているのは、学校教育における「ゆるさ」の意味論だ。前期近代の公教育における学校風土は、いわば「きちんと・ちゃんと・しっかり」文化とも呼びうるものだったが、これは後期近代に移行しても根強く残っている。実際、この3つの言葉を教師の口から聞かない日はなからう。そして、これと一体的に存在してきたのが「みんな一緒」文化である。個性化教育は、ここに風穴を開ける上で大きな足跡を残してきた。が、学校教育に「ゆるさ」を織り込むことの重要性は、もっと意識されてよいのではないか。

学習者の主体的な思考・判断・表現を重視するコンピテンシー・ベースの教育は、学習において子ども・若者により大きな自由度を与え、大人による指示・統制を弱めるという意味で「ゆるさ」が大事になる。唯一の正解を前提とせず多様な解決法や表現方法を重視する点でも、また、単純な正解のない問題の探究につきものの試行錯誤を許容する点でも「ゆるさ」が求められる。

障害者権利条約の批准に伴い教育政策の重要課題となったインクルーシブ教育は、より多様な存在のあり方が承認・尊重されるという意味で「ゆるさ」を志向する。能力（できる／できない）の前に、つまり「できなくてもよ

い」を前提に、一人ひとりの子ども・若者の存在が肯定されるという意味で「ゆるさ」は不可欠だ。

子どもの権利条約の批准を受け、今年度から施行開始となったこども基本法における子どもの意見表明権を踏まえ、デモクラシー重視の教育を拡大すべきだとすれば、学校運営や教育政策の意思決定における子ども・若者の参加を促進するという意味でも、また、学校生活のあり方やそのルールなどをほぼ全て決定してきた大人の側の権限範囲を限界づけるという意味でも「ゆるさ」は枢要だ。

しかし、ここに一定のジレンマが不可避免的に生じる。教師にとっては、「ゆるい」教育の方が「きつい」かもしれないからだ。簡単な正解のない課題の探究や主体的な学びを支えるための教育方法論は、従来型のそれに比べて複雑だ。一人ひとりの学びの姿・声を緻密・的確に捉え、理解する必要性も増す。学習者の自由度拡大に伴い、予測・統制不可能性に対する不安も増す。多様な子どものあり方の受容に伴い、これまでの「あたりまえ」を前提にできないことでも不安は増す。

子どもと教師のウェルビーイングのために、このきつさを操るゆるさの作法が求められている。個性化教育の役目は、まだこれからだ。

東京学芸大学の佐野亮子先生を招聘し、2023年11月18日(土)武庫川女子大学で「自由進度学習セミナー」を開催した。関西を中心に20名を超える参加者があり、活発な話し合いがなされ、自由進度学習について学ぶ貴重な機会となった。

第1部 実践者の話を聞ながら、自由進度学習について学びを深める

① 事例報告Ⅰ 大部 趙徳先生（大阪府泉南市立一丘小学校）

一丘小学校では、児童には「計画力」と「自己調整力」の2つの力を身に付け、「自分で学習を進める」力をつけるために複数のアプローチ(朝予習、フリスタ、SS、オープントタイム)を実践してきた。

「フリスタ」(単元内自由進度学習)を実現させるために、学習の手引きの作成やQRコードを活用したヒント、学習の場の設定を行ってきた。教室のお楽しみコーナーやヒントコーナーも充実させていき、そこにはQRコードが貼り付けてあり、それでヒント動画に飛ぶという工夫も行った。教室の構造は変えられないので、通常教室の隣にある空き教室を使って、半個室の席を用意したり、ローテーブルを用意したり、2・3・4人掛けのテーブルを準備したりするといった工夫をすることで、児童がどこで学習をするのか、選べる工夫を行ってきた。



第一部の様子

児童へのアンケートでも、「またフリスタをやってみたいと思いますか?」では、「とてもやってみたい(96.6%)」と「まあやってみたい」に全員が答えていた。「今回のフリスタでよかったと思うのは?」(選択式・複数選択可)では、「自分のペースでとりくめたこと」が96.6%、「自分で学習できたこと」が82.8%であった。

② 事例報告Ⅱ 島崎 陽子先生（高島市立教育研究所）

昨年度より高島市立教育研究所の研究主題を【「個別最適な学び」と「協働的・探究的な学び」の実現に向けて～子どもの自己調整力を伸ばす、単元内自由進度学習の実践と探究～】と定め、児童の「自己調整力」を伸ばすために、単元内自由進度学習に取り組んできた。実践後の児童にアンケート調査を行うと、96%の子供が「またやりたい」と答えていた。今年度は、「令和5年度研究協力校による新規実践」「モニター教員による実践授業」「令和4年度研究協力校による継続実践」を行っている。教師の教材の作成が大変という声も上がっており、その負担感を

減らすためにも、社会科の実践では、自作動画ではなく、企業のサイトやNHK for school を活用することなども考えてきた。

「モニター教員による実践授業」とは、教育研究所で教材をすべて作成し、それを教材パッケージとして協力校で実践してもらう授業のことであり、教材を作る負担を減らして実践していく。さらに学校を越えて教材を改善しながら実践していくことができるメリットもある。

第2部 一つの実践（5年理科「電流と電磁石」）報告を基に、実際に作成された学習カードや学習環境をブラッシュアップする教材研究ワークショップを行う。3チームに分かれ、数社の教科書と学習指導要領解説を吟味したり、発展課題や学習環境のアイデアをそれぞれ検討したりする。最後に全体で意見交流して、自由進度学習の学習材開発の大切さや、学びたくなる環境設定について考えを深める。

【Aチーム】「学習カードの改善のアイデア」

逆転の発想で別コースを作る。教科書通りではなく、まふつとサルロボ（実験キットで作成できるロボット）を作るところから始め、そこから学習内容につながる展開にしていく。

学習カードは、もっとシンプルにして必要な情報を整理する。実験手順の示し方も並べ方や時系列を意識する。コイル巻きや方位磁石など、上手く作れない子のために教師も準備しておき、どの子も本質的な理科の学び（実験）ができるよう工夫する。



ワークショップの様子

【Bチーム】「発展課題のアイデア」

たとえば「フットサルカップ」「ダンシング○○」「マイ・スピーカー」などYouTubeやNHK動画を参考に、楽しい活動や、面白い「ものづくり課題」を提示する。ロボットで競技するコートを作って置いたり、参考作品が試せるコーナーをつくったりして、発展に進むのが楽しみになるような課題を考える



全体交流の様子

【Cチーム】「環境構成のアイデア」

実験に必要な材料や道具を自由に使えるようにしたり、一人で集中して考えたい子のために校内にある個人机や長机を理科室周辺に配置したりする。困った時に参考になる資料は掲示物にして貼っておく。理科の重要wordなどは掲示物の見せ方（隠し方）を工夫する。電気エネルギーの系統的な学びができるよう3年～6年の学習内容が見られるコーナーをつくる。実験キットの車の速さを比較できるようなサーキットコースを理科室にはりめぐらす。

（文責・関西・中西）

◆こんな授業をつくってみました

一人ひとりが学習の主人公を目指す

マイプラン学習 ～4年算数「面積」～

福岡県宇美町立桜原小学校

岩崎もも



1 単元計画について

子どもが、自分で自分の学習を作り上げることができることを意識して単元内自由進度学習（「マイプラン学習」）の単元計画や学習内容を考えた。「校区の公園の面積調べをしよう」を最終ゴールとし、「自分がよく遊んでいる公園はどのくらいの広さなんだろう？」「どこの公園が一番広いのかな？」と子ども達に問いかけた。子ども達は、校区の地図と公園の縮尺図を見ながら、「〇〇公園が一番広い！」、「でも△△公園も同じくらいの大きさに見えるよ！」と身近な公園の広さについて興味を持ち、意欲的に学習に臨むことができた。

また、自校が「選択」と「参画」をキーワードにした授業作りを大切にしているので、学習の中でどんな「選択」をすることが可能か、自ら学習に「参画」していく子どもの姿をイメージしながら学習内容を作っていた。

ワークシートは、子どもが取り組む順番を選ぶことができるようにした。教科書通りの道筋だけでなく、他社の教科書も参考にして順序を選ぶことができるようにしたり、ワークシートが終わるごとに活動コーナーを設けたりして選択・参画する機会を多く取り入れた。活用問題では、いくつかの課題を用意し、取り組む内容を選ぶことができるようにした。活用問題に取り組むことができる時間は、学

習の進度によって一人ひとり違うので、一番取り組みたい課題を選ぶ子どももいれば、取り組みたい順を自分で決めて複数取り組む子どもも見られた。

2 学習材や学習環境の工夫

ワークシートでの学習だけでなく、子ども達が活動を通して面積とは何かを学ぶことができるような学習材や学習環境の工夫を行なった。活動コーナーをわくわくコーナーとし、子どもが楽しみながら面積を学習できるような環境づくりをした。

量感を養うためのわくわくコーナーでは、 1cm^2 はどのくらいの大きさなのか体感することができるように、 1cm^2 の大きさの工作用紙を子ども達がいつでも目にしたり手に取ったりできるようにした。

「面積が 10cm^2 になる図形をつくろう」のわくわくコーナーでも、「 1cm^2 の 10 個分が 10cm^2 」だということを、実際に自分で図形を作ることでも実感できるようにした。また、 1m^2 はどのくらいの大きさなのかを体感することができるように、新聞紙で 1m^2 をつくったり、その 1m^2 の新聞紙に 100cm^2 の工作用紙を敷き詰め「 $1\text{m}^2 = 10000\text{cm}^2$ 」だということを視覚的に確かめたりすることができるようにした。「 100cm^2 を 100 個敷き詰めるだけでも大変だから、 1cm^2 を 1 万個敷き詰めるの

は、時間がかかっちゃうね」という子ども同士
のつぶきもあり、単位間の関係の理解が深ま
ったと感じた。

複合図形の面積の求め方を説明するわくわ
くコーナーも設けた。ワークシートだけで面
積を求める学習を完結するのではなく、自分
の考え方を言葉にして表現することで、さら
に理解を深めることをねらいとした。

「YouTuber になりきって説明動画を撮影し、
クラスのサイトにアップしよう！」という課
題に対し、子ども達は、ホワイトボードに図や
ポイントを書き込みながら説明したり、自分
の解いたプリントを見せながら説明したりと、
分かりやすく伝えることを意識して YouTuber
になりきっている姿が印象的だった。言葉に
出して説明することが苦手な子どもも、ホワ
イトボードに分かりやすく書き込んで説明に
挑戦するなど自分の強みを生かして学習を選
択し参画していると感じた。



YouTuber になって面積
の求め方を説明するた
めに準備をする一人学
びの様子

さらに、運動場に 1a のコートを作ったり、
各教室の面積を調べたりと、子どもが面積の
広がりを感じられる発展問題も準備した。



運動場に 1a のコート
を作っている協働的
な学びの様子

3 子どもの学ぶ姿から

学習が始まった頃は、隣に座っている友達
とペースを合わせて学習する子どもが多かつ
た。学習が進むに連れて、教科書や掲示物、ヒ
ントカードを頼りにしながら一人で学び進め
ることができていた。分からないところは友
達に聞いたり、わくわくコーナーでは友達と
一緒に取り組んだり、必然的な交流や協働
して学ぶ姿も多く見られた。毎時間の学習の
振り返りでも、「今日は自分でできて嬉しかつ
た。明日もがんばろう」、「〇〇さんにわか
らないところを聞いたらできるようになった。
ありがとう。」など、自分の学びに対する振
り返りや友達の名前もでてくるような振
り返りがあり、子どもが自分の学びを大切
にし、真剣に学習と向き合っていることが
伝わってきた。

4 終わりに

マイプラン学習をする前と後で、一斉授
業でも子どもの姿が大きく変わった。特に、
自力解決の時間では、本時の課題を一人で
時間いっぱい解決しようとする姿が見られ
た。一人で学ぶ時間に何をしたらいいか分
からず、ただその時間をやり過ごしていた
子どもや、すぐ教師や友達の力を借りて
いた子どもも、マイプラン学習後の学習
では、自分でできるところまでやってみ
たり、教科書を見ながら解いてみたりと、
自分で取り組むことができるようになった。
マイプラン学習で、自分で解けたときの
喜びや自分で解く楽しさを感じ、学び
方も学ぶことができたからと考える。

子どもの学ぶ力の可能性を改めて感じた
単元内自由進度学習だった。「自分がこの
学習の主人公だ！」と一人ひとりが感じ
ることができるよう、これからも子ども
達といっしょに学習を作り上げていき
たい。

◆こんな授業をつくってみました

子供の気づきの質を高める「まちたんけん」

2 年生活科

宮城県仙台市立榴岡小学校 伊藤志保



1 コロナ禍がもたらした影響

今年の5月、新型コロナウイルス感染症が5類に移行され、制限されていた教育活動も少しずつ戻ってきた。しかし、移行前の学校現場はというと、入学式は縮小され、周りは顔を見ることがない友達ばかり。皆、正面を向き、コミュニケーションを取るような活動はすべて制限されてきた。低学年は、感情のコントロールや気持ちの伝え方が未熟であるが、4月にあった子供たちは、その様子に拍車をかけた状態に思えた。

2 「まちたんけん」で目指す姿

そこで、当時2年生の担任だった私たちが、目指す子供の姿として掲げたのが「人との関わりを通して、自分の考えを伝えることができる子供」だった。そして、「人との関わり」と考えたとき、今年は生活科「まちたんけん」を中心に育んでいこうという話になった。

単元のデザインを考えるにあたり、まず私が行ったことは、単元で「目指す姿」を考えることだった。

学習指導要領から、子供・地域・学校の特性を踏まえ、ゴールを明確に設定した。今回は、「地域の人自分たちのためにたくさんのことをしてくれているんだな。」「もっと仲良くなりたいな。」とした。子供たちの言葉で具体

的に考えることで、ゴールがより明確になる。このような気づきが得られるように、単元のデザインを考えた。

3 単元構想

本校で毎年行われていた「まちたんけん」だったが、私は計画を変えることにした。大きく変えたのは2つ。「回数」と「手伝い」を入れたことである。

まずは、探検に行く回数を「3回」に増やし、「同じ場所へ行くこと」にした。同じ場所に行った方が、地域の人に親しみを持てると考えたからである。

次に、3回目に「手伝い」を行うようにした。目指す姿を考えたとき、インタビューで聞くだけよりも、実際に働いた方が自分事として考えられると思ったからである。計画を変え、体験活動を充実させることで、子供たちの気づきの質を高められるようにした。

4 「共有」の時間

しかし、体験活動だけを充実させても、気づきの質は高まらない。そこで大切にしているのが、「導入」と「共有」である。

「導入」は、子供が主体的に学習に向かうような工夫をしている。「導入をどう楽しくしようか」といつも考えている。

そして、それと同時に大切なのが「共有」の時間である。2回目の「まちたんけん」終了後、実際の授業の中で、次のようなやり取りを行った。

子供：「ハロウィンの商品が増えていました。」

子供：「かき氷が人気だそうです。でも、もう少しで終わってしまうそうです。」

教師：「人気なのに、終わってしまうの？どうして？」

子供：「・・・。」

季節によって商品が変わることは、大人にとって「当たり前」のことかもしれない。しかし、それを「当たり前」として聞き流さずに、子供の「気付き」として教師が見取ることで、次の活動が変わってくる。私の質問に答えられなかった子供たちも、自分たち聞いてきたようで、お店の方から「寒いときにかき氷を出すと、お客さんがおなかをこわしてしまうからだよ」と教えてもらった。」と報告があった。単なる発表会で終わっていれば、このような気付きは得られなかったかもしれない。

5 「手伝い」から気付くこと

活動3回目の「手伝い」では、掃除、商品の袋詰め、商品並べ、広告入れなどをさせてもらった。新聞屋に行った子供たちは、すべて機械で行うと思っていたようで、手作業で広告を入れるのに驚き、仕事をして「疲れた。」と話をしていた。それを「大震災のときも新聞を配達した」と聞いたのだから、さらに衝撃を受けたようだった。

また、普段買い物にはついて行くだけの子供にとって、「商品の向きをそろえる」という

ことも驚きだったようだ。掃除が苦手な子にとっては、広い場所を少ない人数で掃除することも大変だったようだ。しかし、店・施設の人にとって、これは日常なのである。頼まれてやっている仕事でもない。だから、私たちは子供たちに、このような質問を投げかけた。「なぜこのようなことしているんだろうね？」と。インタビューや、さらに手伝いをしてきた子供たちは、自信満々に答えたのだった。「お客さんのため」「みんなのため」だと。

6 「まちたんけん」の終わりに

この学習を通して、学んだことを子供たちは地域の人に伝えたいと話をしていた。本当は、学芸会で伝える予定だったが、コロナ禍で地域の人とは呼べなくなった。地域の人たちが来ると思い、「まちたんけん」の歌もつくった。来るものだと思っていた子供たちからは「意味ないじゃん！」と言われたが、他の子供が地域の人向けの学芸会を提案した。そこで、最後に「ありがとうの会」を開催することにした。

招待状、プログラム、プレゼント、伝え方など、すべて子供たちが考えた。人前で話すのが苦手だった子も「話したい」と言い、クラスで話し合った結果、私のクラスは全員が発表することになった。

発表の中で一人の女の子がこのように話をした。

「仕事はやってみて、とても大変でした。でも地域の人はこちらを毎日やっていて、ぜんぶ私たちのためにやってくれているんだなということが分かりました。」

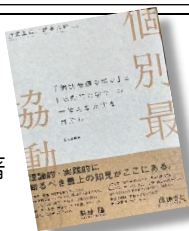
私は、この単元で「目指す姿」は達成されたと思った。

本の紹介

日本個性化教育学会会員の著書を紹介しします。全国の先生方の教育実践や研究をサポートする良書です。会員の方で本を刊行された方はお知らせください。



「個別最適な学び」と
「協働的な学び」の一
体的な充実を目指して
奈須正裕 伏木久始 編著
北大路書房 2640 円



多様な専門分野の著者らが、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を理論と実践の両側面から考察。日本の教育の実情を歴史的・国際的に捉えたうえで、これからの時代に求められている教育実践を描き出す

◇授業公開・・愛知県緒川小学校 学校視察日として公開 2月13日(月) 10:00~15:30
参加費 1000 円 問合せ 緒川小教頭 種村修一先生 TEL 0562-83-20
申込みは一週間前まで Google フォーム <https://forms.gle/HKiYWJsYEKCgqft86>

◇研究会・・①九州個性化教育学会研修会 2月23日(金) 14:00~16:00
自由進度学習の実践報告と研究協議
実践報告者: 福岡県糟屋郡宇美町立桜原小学校 梶原捷聖、池田信一先生
連絡先 川原俊彦: toshik 3082@yahoo.co.jp

②関西個性化教育学会学習会 3月30日(土) 武庫川女子大学
テーマ「探究と協働」講演: 奈須正裕先生(オンライン)
講演後、4つの講座で村口、箱根、田中、松井先生の実践と考え方の紹介
連絡先 中西徳久 to.nakanishi@edu.nishi.or.jp 後日学会 HP で紹介

◇東京事務局より・・  本学会のHPについて 

- ・全国大会の情報ははじめ、研修会の案内に関する各種の情報をお知らせしています。掲載している内容は、以下の通りです。
 - 全国大会や研修会・研究会の案内との様子
 - 入会の手続きの案内
 - 学会組織図
 - 学会誌編集規程
 - 学会の前身「全国個性化教育研究連盟」の記録とアーカイブ
 - 各地の個性化教育学会の情報
 - 各種お知らせ
 - 今後の活動を案内など。
- ・会員同士の情報交流の場でもありますので是非ご活用ください。HP 広報をご希望の方は、担当までお知らせ下さい。(担当 佐久間)

事務局への問い合わせ 庶務部長 佐久間茂和
〒362-0064 埼玉県上尾市小藪谷 77-1 3-28-502
TEL 080-5429-1681
E-mail sakuma.shigekazu@jcom.zaq.ne.jp
日本個性化教育学会 HP <https://koseika.com>.

日本個性化教育学会 第 42 号
2024 年 1 月 21 日発行
編集責任者 事務局長 奈須正裕
編集 中澤米子

